



The Japanese Association
of Organic Geochemists

Newsletter

Organic Geochemistry 56

Jan 11, 2013

目次

Report	2
第 30 回有機地球化学シンポジウム (2012 年仙台シンポジウム) 開催される 2012 年度有機地球化学会 研究奨励賞 (田口賞) 受賞者決まる	
People	4
「岩手っ子、博士になる」 高橋 聡 信じる? 信じない? 石田 章純	
Book review	9
「気候変動の現在、過去そして近未来—地球温暖化問題を考える— (秋山 雅彦・著)」 氏家 良博	
Invitation 山中 寿朗	10
Topics	11
Contribution of bacterial cells to lacustrine organic matter based on amino sugars and D-amino acids/ Continuous flux of dissolved black carbon from a vanished tropical forest biome/A reduced organic carbon component in Martian basalts	
Information	13
2012 年度総会議事録/会費納入のお願い/有機地球化学会ホームページ、さらに更新!	
Announcement	21
有機地球化学賞 (学術賞) 2013 年度受賞候補者推薦の募集/研究奨励賞 (田口賞) 2013 年度受 賞候補者の募集/ROG Vol.29 への投稿原稿を募集中!!	
編集後記	23

Report

第 30 回有機地球化学シンポジウム (2012 年仙台シンポジウム)開催される

第 30 回日本有機地球化学シンポジウム (2012 年仙台シンポジウム) は平成 24 年 8 月 22～23 日にかけて東北大学百周年記念会館 (仙台市) にて開催されました。参加者数 61 名 (一般 37 人、学生 24 人)、口頭発表件数 26 件、ポスター発表件数 20 件でした。世話人をしていただいた東北大学の方々にあらためて御礼を申し上げます。



平成 24 年 8 月 22 日 東北大学百周年記念会館前にて



会場



ポスター発表会場



中田亮一さん (広島大) による
ポスター賞受賞記念スピーチ

2012 年度有機地球化学会 研究奨励賞(田口賞)受賞者決まる

2012 年度研究奨励賞 (田口賞) は、選考委員会で審議された後、運営委員会で高橋聡会員に贈ることが承認されました。そして 8 月 22 日に開催された 2012 年度総会後に表彰式が行われ、賞状と賞金が河村会長から高橋会員に授与されました。

研究奨励賞 (田口賞) 第 15 号

受賞者：高橋聡 会員 (東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻・助教)

授賞題目：「古生代-中生代境界における遠洋域深海堆積岩の古生物学的地球化学的研究」

受賞者の報告と紹介

高橋聡会員は、2011年3月に東北大学大学院理学研究科を終了して博士（理学）の学位を取得し（題目：Geochemical Studies of the Latest Permian-Early Triassic Deep-Sea Sediments, 指導教員：海保邦夫教授）、2011年4月から東京大学助教として、同じテーマの研究に取り組んでこられました。高橋聡博士の専門は、主にコノドント化石を用いた微化石年代層序と堆積岩試料を用いた地球化学で、両者を組み合わせてこれまでに優れた研究成果を挙げてきました。その研究成果は、卒業研究から現在(東京大学助教)までの10年間で、3編の査読付き筆頭論文と7編の共著論文にまとめられて公表されています。高橋氏の主な研究は、日本やニュージーランドの付加体に残る深海相堆積岩を用いて、史上最大の大量絶滅が起きたペルム紀末からその回復期である前期三畳紀における古太平洋の古環境変動記録の復元に取り組んだものです。データの空白域である当時の外洋の環境変動の記録を示すものとして大量絶滅事変の実態解明に対する高い貢献度があります。

高橋氏は、卒業研究時から野外調査を行っていた岩手県北部北上山地において、2009年に世界的に連続性の保存が良いペルム紀三畳紀境界層を認定し、研究活動を続けています。採取した岩石試料の分析により、同セクションの連続的な有機炭素同位体比を示し、ペルム紀末大量絶滅時のシグナルである炭素同位体比の減少をとらえました。この変動記録には浅海域で報告されてきた嫌気性細菌などの増殖が原因と考えられる有機炭素同位体比値の増加がみられず、遠洋域においては大量絶滅期前後も通常の光合



研究奨励賞授賞式 高橋聡氏（東京大）

成による一次生産が続いていたと考えられます。さらに、現在では、詳細な酸化還元環境の変動記録復元のため、同セクションの微量元素組成の分析を進めています。また、高橋氏は、コノドント化石を用いて岐阜、愛知両県にまたがる木曽川下流地域において前期三畳紀Spathian 期から中期三畳紀Anisian 期の地層連続体を確定しました。同セクションの堆積物から可溶性有機物を抽出し、前期三畳紀末に起きた藍藻類の生産量と放散虫の多様性の減少をともなう無酸素海洋発達の証拠を得、大量絶滅後の高等生物の回復の遅れの原因の一端が、このような無酸素海洋の頻発であると発表しました。このように、高橋氏はこれまでに優れた研究成果を世に発表してきました。そればかりか一般講演会などのアウトリーチ活動も積極的に行っています。

そのような姿勢は、今後も有機地球化学会をはじめとした各研究コミュニティをリードする人材として更なる活躍が期待されます。このたびの田口賞の受賞を契機に、益々のご活躍を期待いたします。

（東北大学 海保邦夫 会員）

People

今回は、本学会会員から田口賞を受賞された高橋聡さん（東京大）、学会の外からは石田章純さん（東京大）に寄稿していただきました。

「岩手っ子、博士になる」

東京大学理学研究科 地球惑星科学専攻 助教

高橋 聡

高橋聡と申します。私は岩手県出身で、高校卒業までの期間を岩手で過ごし、大学入学から博士号を取得するまでの9年を仙台で過ごした後、東京大学の助教に赴任いたしました。東京に越してきて2年目になりますが、未だ満員電車の車内をかき分ける勇気もなく、まだまだ田舎者丸出しの生活を送っています。

私が地球科学を志すきっかけは幼少期にあります。幼稚園くらいの頃だったそうです。「大むかしの生物」という図鑑を眺め、「ブロントザウルス！」と自分の名前より先にカタカナを覚えたいのです（図1）。私が古生物に関心をもったことを見出した母は、小学生の頃には幕張で開催された恐竜博や岩手県釜石の三陸海の博覧会などの化石の展示を見に毎年連れて行ってくれました。今でもそのときに大きな恐竜の全身骨格やアンモナイトの壁を眺めたことを強烈に覚えています。高校は、親元を離れ盛岡で寮生活をし、盛岡第一高校に通いました。私はこの高校の自由な校風に伸ばしてもらったと思っています。地方から出てきた私に、担任の先生は「隠さず、人に合わせず、自分のやりたいこと

を主張せよ」といったことを常に言っておられた気がします。このときは“人に合わせず”くらいしかできませんでしたが……。また、現在は受験勉強のニーズが少なく地学を学ぶ機会は少ないようですが、地学を専門に教える先生から授業を受けることができたのも幸運でした。私が教えて頂いた地学の先生は、川上雄司先生、杉山了三先生というのですが、御両名共に研究論文の執筆を手がける熱心な先生で、杉山先生は2010年の地質学会功労賞を受賞されていてご存じの方も多いのではないかと思います。高校3年生の時には、「自分のやりたいこと」を具体的にすべく、ぼんやりとしていた古生物への興味をふくらませに福井の恐竜博物館の講演会に出かけました。講演者は、「大むかしの生物」を監修された濱田隆士先生です。私は濱田先生の講演の後に「化石を研究したいと思うがどうしたらよいか」という漠然とした質問をしたのですが、先生は「大学に進学し、地球科学を”広く”学ぶように」とアドバイスをしてくださり、講演会後にも壇上から降りてきて直接話をして下さいました。これは、地球科学に自分の進路を決める大きな体験でした。

大学は、宮城県の東北大学に進学しました。早速、夢見た研究に熱中・・・とはいかず、このときはフットサルとスノーボードに浮気をしました。成果はとにかくモテたかったのだと思います。そのような遊びに行くお金は沢山アルバイトをして稼ぎましたが、学部生の時は地学専攻の吉田武義先生の下で研究室のXRF分析用の岩石の粉碎と、XGTの液体窒素の補充をするアルバイトをさせて頂きました。このときは、このアルバイト中に習得した技術が、自分の将来、



図1. 実家にある図鑑「大むかしの生物」

地球化学の研究作業に活かされるとは想像もしていませんでしたが…。本格的な研究を行う時期は学部3年生のときに訪れました。卒業課題の研究として永広昌之先生につき、岩手県北部北上山地の付加体地質の調査をはじめたのです。永広先生のアドバイスは「あの辺、コノドントが出る“らしい”よ」で、あとは自由に調査してくるよう指示されました。私は、単身調査地域に居候をして調査を始めましたが、最初の1年は石の違いを見分けることもできず、大学に持ち帰った岩石を薄片にして眺める日々でした。露頭と石の種類がようやく一致し始めた調査2年目、大きな転機がありました。露頭から取り出した単層の剥離面から、小さな(0.5mmくらい)ギザギザした形“コノドント化石”を発見したのです(図2)。それからは夢中になって露頭で化石探しをしました。コノドントが入った岩石を沢山採取した私は、鈴木紀毅先生のすすめで宮崎大学の山北聡先生のところにコノドント化石の処理法を教わりに行きました。1週間のあいだ、講義室の中、寝袋で寝泊まりしながらコノドントの探し方のポイントを1対1で教わりました。余談ですが、学部時代に一人で宮崎に向かうのは経済的にも大変だったのですが、当時アルバイトしていたラーメン屋さんの店長に「行って来いっ」といつもより厚い給料袋を手渡してもらったことを覚えています。そのようにして、地質図と砂岩組成、そして化石年代が揃った卒業研究を仕上げることができました。

大学院からは、東北大学の海保邦夫先生のもとで研究を行いました。私が目標とした研究は、コノドント化石で年代を明らかにした層序の堆積岩試料を地球化学分析し、古環境変動を復元するというものでした。修士の1年目、同時に

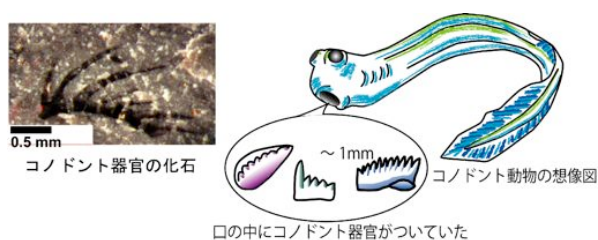


図2. コノドント化石の写真。20倍ルーペでこのような形の化石が露頭で次々とみつかった。

研究室に加入したのが大庭雅寛先生でした。有機地球化学が専門であった大庭先生は、私の研究について親身に相談に乗って下さり、試行錯誤と試験分析を繰り返した結果、有機物含有量が少ない深海の堆積岩から有機分子化石を検出する方法を確立することができました。また、素晴らしい発見にも恵まれました。卒業研究から調査していた北部北上山地から古生代と中生代のコノドント化石が発見されていたのですが、山北先生との検証の結果、史上最大の大量絶滅が起きた古生代中生代境界、すなわちペルム紀／三畳紀境界の地層が良質な保存状態で残されていることが明らかになったのです。この地層は、私の地球化学研究の重要な対象となりました。斯くして、私は世界に対抗しても遜色ないペルム紀三畳紀の深海層序のサンプルを国内外から揃えることができ(日本以外にニュージーランドや中国に調査に行く機会を得ました)、化石年代の詳細と各種の地球化学分析(安定炭素同位体比、硫黄同位体比、有機分子化石検出、微量元素分析)の研究を行うことができたのです。分析装置や専門の議論は、研究室の枠を超えて同大学の掛川武先生や吉田武義先生や産業技術総合研究所の坂田将先生をはじめとした様々な先生方や先輩方にお世話になりました。明らかになる新しい研究結果の数々に、仲間と一緒に驚き、興奮し、夜な夜な実験室で語り合った思い出は、今も私を次の研究に押し進める大きな原動力です。さて、結果が出たらその成果は論文にして公表するものです。その過程に大きな手を貸して下さいしたのは海保先生です。ゼミや日頃の会話の中で、先生自身が研究を計画的に進め、論文を執筆するために心がけていることを語って頂き、論文投稿前には何度も私の原稿に目を通して修正稿を返して頂きました(図3)。修士論文をまとめていたころには「高橋君がまだ残って原稿を書いているからもう少し残る」といって、教室総出の忘年会に出る時間を遅らせてわざわざ議論の時間をとって下さった思い出もあります。そのおかげで、大学院時代の研究成果を複数の国際誌論文にまとめることができ、博士論文としてもある程度のボリューム

ームにすることができました。

今思い返すと、博士論文をまとめていた数ヶ月は、自分を伸ばす充実した時期であったと感じています。私たちの代の冬は、政府予算案の関係で学術振興会の特別研究員採択合否が先送りになり、次年度のことが例年よりも不明瞭でした。また、今の仕事につながった公募の書類や面接の時期とも重な

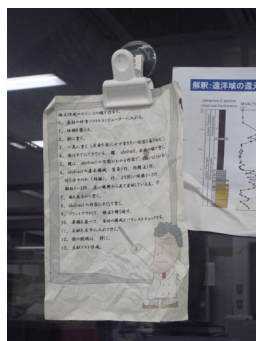


図 3. 海保教授の論文執筆のための10箇条。震災後の散乱した書類・図書類から残ったもののひとつ。

り、複数のことを同時に進める必要があり、「自分にそんなことができるのか？」と不安な日々だった覚えがあります。そんな中、海保先生と昼食を共にしながら聞いた「今後の将来のために自分の忙しさや気持ちも管理できるようになれ」という言葉に勇気づけられ、がむしゃらに取り組みました。ここで諦めずに頑張っ、今では本当によかったと思っています。ほどなく私は、博士論文の審査を通過し、学位をとることができました。図鑑を眺めて夢見た化石博士とは少しスタイルは違うものの、現代地球科学を“ある程度広く”学んだ末の結果だったと思います。学位審査を終えた直後、高校生の頃に私に助言を下さった濱田先生がお亡くなりになったことを報道で知りました。博士号をとって、博物館や学会でもう一度会って話がしたかったのですが、それがかなわず本当に残念でなりません。

そして、3月に東北大震災が起きました。私は、調査のためニュージーランドにいましたが、大学のある仙台や家族や恩師の住む岩手の沿岸が地震や津波の被害を受けていく様子を生放送で見て衝撃を受けました。幸い、大学・家族関係に大きな人の被害はありませんでしたが、東北大ではまだ建物や実験設備の復旧が十分ではないようです。

震災のため卒業式は中止となり、私はヘルメットをかぶって夜逃げのような急ぎの引っ越しをし、4月から東京大学での新生活を始めました。はじめての学生実習にドキドキしながら挑戦したり、会議で今まで遠くから見ていた先生におそろおそろ「さん」付けをして呼んでみる、さまざまな研究分野の方と交流し“ある程度広く”学んだ地球科学は氷山の一角であったことを痛感するなど.. 毎日をエキサイティングに過ごしています。研究活動は同講座の多田隆治先生と共同で行っています。実はこの多田先生、海保先生や私の母と同年の方ですが、やれ google calendar や facebook を使え、やれ iphone、ipad だと、私の想像する同年代、そして地学の先生のイメージとはかけ離れたシティボーイです。セミナーの学生も各々のデジタルデバイスでノートをとる状態で、アナログ派だった私は、最初はとても面食らいました。これから、都心の真ん中の地学教室でこのメンバーとどんな発見や感動の瞬間を迎えられるかとても楽しみであります。

ここまで自身を振り返ってみて、本当に多くの人に恵まれて今の私があることを実感します(図4)。沢山の恩義に報いるべく、今後も精進し、研究者として人として成長していきたいと思っています。

So Many Thanks!



図 4. 今までにお世話になった人たち。これからも頑張ります!!

信じる？信じない？

東京大学大気海洋研究所 特任研究員
石田 章純

私は、堆積岩に残された鉱物や有機物の産状、それらの軽元素安定同位体を用いて、古い時代の生命の進化や、当時の地球表層環境を明らかにするという研究を行っています。

私がこの研究に興味を持ったきっかけは、指導教員だった掛川武先生(東北大学)の授業でした。恥ずかしながら、私にはもともと「小さいころから恐竜が好きだった」「星を見るのが好きだった」など、現在大成されている多くの研究者の方々が抱いていたような、科学に対する殊勝な好奇心はなく、「なんとなく理学(それも物理)が面白そうだから」、という比較的漫然とした理由で大学に入学していました。単に自分の好奇心の赴くままに進んできたように思えます。しかも、もともと物理学科に入学しようと考えていたため(厳しい受験競争の結果、第一志望の物理学科ではなく、第二志望の地球科学科で入学していました)、地学の研究内容にはほとんど興味がありませんでした。

しかし、大学1年生の秋、ある大講義室の授業で私の運命は変わってしまいました。当時、地球科学科から物理学科への転系を考えていた私は、その授業中にも、次の物理実験実習に備えて、“内職”をしていました。200人は入る大講義室、スライド形式の授業、授業をする先生が教壇に張り付いていさえすれば、内職にはうってつけの環境でした。ところが、その先生は、スライドを2,3枚紹介すると、講義室中を歩き回り、学生一人一人に「きみは信じる？信じない？」と問いかけて歩いていた。それが掛川先生でした。スライドには、薄切りした岩石の中に、ただの茶色のシミにしか見えない塊が映し出されていました。掛川先生は、「これは最も古い生命の化石だと言われているけど、研究者の間でも本当かどうか意見が分かれているものだ」、と説明していました。その他にも、“30億年前の生命が作ったしましま模様”や“海底数



Gunflint 層(カナダ)の津波堆積物の調査。Gunflint 層は堆積層の最上部に津波堆積物を含む。これは Gunflint 層堆積の最終期に、付近に衝突した隕石の影響により形成されたと考えられている。

千メートルの熱水噴出孔で生きる生物”など、これまで聞いたこともないような世界を紹介してくれました。そして最後に、「地球最古の生命の証拠に直接迫ることができるのは、化学科でも生物科でもなく、地球科学科である」と教えてくれました。これが、私が生命起源地球化学の分野に興味を持ったきっかけです。

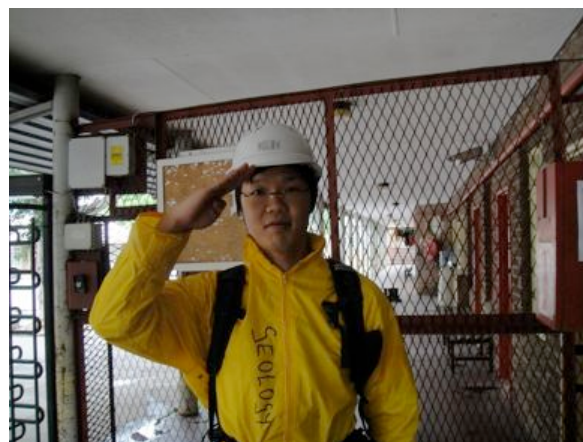
私のいた大学では研究室への配属は学部4年生からでした。そこでまず私は、学部2年生から関連分野の本を読みあさりしました。3年生からは、掛川先生の部屋を週に2、3回訪ね、生命起源と進化関連の本を借りたり、岩石薄片を借りて観察したりということを繰り返しました。その甲斐あってか、4年生で掛川研への配属が決まり、卒業論文のテーマが決まりました。私が選んだテーマは、その後、博士号を取得するまで取り組むこととなる、初期原生代の微生物活動と海洋環境の研究でした。研究対象はカナダのガンフリント層という堆積層です。ガンフリント層は世界で初めて微生物の化石が発見された地層で、初期原生代から太古代にかけての微生物研究の先駆けとなった、世界的にも注目度の高い地層です。もともと、微化石の発見以前に鉄鉱層としても資源的に注目されていたことも

あり、岩相や鉱物記載など、基礎的な地球科学的研究はすでにやり尽くされていました。そこで私は鉱物の産状とともに、有機物の詳細な地球化学的分析を行うことで、これまでの研究よりもさらに高精度に、かつ複眼的に当時の微生物活動および海洋環境を評価するという手法をとってきました。自ら地質調査を行い、岩石試料を採取し、分析法を考え、分析を行い、データを出し、考察し、太古の地球における進化のストーリーを考える、という一連の作業を、はじめは逐一教わりながら、次第に自分で考えながら進められるようになり、気がつけば研究の世界にのめり込んでいました。そして、誰も知ることのできない太古の地球の姿を、地球科学を通して見るができるということが楽しくて仕方がなくなっていました。

古い時代の生命の痕跡を探るためには、堆積岩中の鉱物の産状や組成、微量元素の存在、有機物の軽元素含有量や同位体比などをつぶさに分析し、それら複数の証拠が指し示すいくつかの解の中で、全ての証拠を説明する最適解を探す、という作業を延々と繰り返さなければなりません。また時にはそういった手法自体を自ら開発、あるいは既存の手法を目的に合うように改良し、検証する必要があります。博士課程在学中に私が取り組んだ、段階燃焼法による有機物窒素安定同位体比の分析もそうした取り組みの一つでした。大阪大学の橋爪光先生に師事し、この手法の習得に取り組みました。既存の手法を用いたとはいえ、まともなデータを出すよう分析ラインを改良するまでにはトライアンドエラーを何度も繰り返しました。しかしどうにか、

初期原生代堆積岩中の有機物に窒素同位体比値の不均質を見だし、成果としてまとめることができました(Ishida et al., *Geochemical Journal*, 46(3), 249-253, 2012)。こうした作業は地道で、成果のでない期間が続けば気持ちもどんどん落ち込んでいきますが、反面、成果が出た時の感動と興奮は他に得難いものがあり、それもまた研究の醍醐味だと思います。

研究は一人で行うことはできません。たくさんの人と議論し、悩み、解決し、支えられ、導かれ、洗練されていくものです。しかしその一方で、自分自身の強烈な意思が必要とされます。それはつまり、科学における自分の哲学を持つことの重要性を意味しています。何を明らかにしたいのか、そのために何が必要で、どんな分析をすればいいのかは、自分が培い、抛り所にしてきた学問の中からしか答えを出せません。私は今も研究で悩むと、師の言葉で自分自身に問いかけます。「きみは信じる？信じない？」。



2009年に南アフリカ sheba 鉱山を調査した際の写真。

Book review

「気候変動の現在、過去そして近未来—地球温暖化問題を考える—」

秋山雅彦・著

地団研ブックレットシリーズ 12、A5 判、96 頁、価格 1,000 円

2011 年 3 月 11 日の東北地方太平洋沖地震とそれに伴う東日本大震災、さらに福島第一原子力発電所の事故により、日本では地震予知や原子力発電等に関する科学者や研究者への信頼は大きく損なわれた。同様に、地震予知や防災、さらに原子力発電の安全神話を無批判的に報道してきたマスコミやジャーナリズムの姿勢も糾弾された。原発事故の問題が大きくなるにつれて、それ以前大きく取り上げられてきた地球温暖化問題は日本では片隅に追いやられてしまった感がある。しかし、温暖化問題は現在進行中の地球規模の問題であり、政治・経済にも大きく影響するため緊急の対応が必要であることに変わりはない。

本書は、地学団体研究会の機関紙である「地学教育と科学運動」に 2008～2011 年に著者の秋山氏が連載した 7 編の記事をもとに最新のデータを付け加えて書きまとめられたものである。本書はⅠ章「現在の地球について知っておきたいこと」、Ⅱ章「過去の地球環境をどう読むか」、Ⅲ章「完新世の気候変動と近未来の気候予測」から構成されている。

地質学者である著者は齊一説の立場から「過去の事象から現在を理解し、未来の予測のための鍵」とする考えに従い多くの文献から地質時代の気候変化を解説し、それをもとに現在の地球温暖化の原因を推定し、さらに近未来の気候変動をどのように予想するかを説明している。

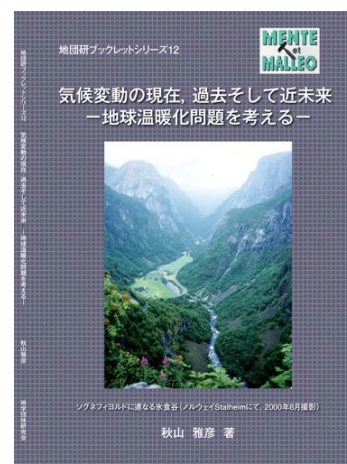
地球温暖化問題は国連で取り上げられ、米国の大統領選挙の争点の一つとなるなど政治的問題となっており、「climategate 事件」等のスキャンダラスな側面も有している。著者は、政治的

判断等を排除し、純粹に自然科学として温暖化を歴史科学的に追求した。その結果、気候の自然変動の要因を重視することになり、地球温暖化の原因を人類による温室効果ガス生成に強く求める現状に警鐘を鳴らしている。

ブックレットで紙数が限定されているため、古地理図や海流図等の図が少ない点、及び図の印刷が一部不鮮明である点が残念である。著者は「よみがえる分子化石」(共立出版)等、専門的内容を平易な言葉で表した一般向け啓蒙書を著わしてきた。本書の最後には「私の執筆活動はこの著作で最後になると思います・・・」と記されているが、是非とも一般読者向けの地球温暖化問題に対する地質学者からの啓蒙書を書いてもらいたいと希望する。

本書は市販されておらず、入手ご希望の方は地学団体研究会(電子メール: chidanken@tokyo.email.ne.jp またはファックス: 03-3983-7525)まで問い合わせください。

(弘前大学 氏家 良博)



Invitation

来年度の有機地球化学シンポジウムへの招待状が届きました！

来年度の第31回有機地球化学シンポジウムはお盆明けすぐの8月19日（月）より21日（水）の三日間（最終日は巡検）の日程で岡山県は倉敷市にて開催させて頂くことになりました。会場は、倉敷駅の南側、美観地区に近い倉敷芸文館です。この施設は日本将棋連盟公認の女流タイトル戦である大山名人杯倉敷藤花戦の対局場としても利用されています。口頭発表会場は将棋界にとって最も偉大で前人未到の大記録を次々に生み出した倉敷出身の棋士、大山康晴十五世名人の功績を偲ぶ関係資料を展示した記念館の2階に位置します。また、倉敷美観地区は、江戸から明治期にかけての白壁や煉瓦の町並み

が保存され、大原美術館や市立自然史博物館など文化施設も集まった、歴史と文化の感じられる岡山を代表する観光地の一つです。最近では、倉敷駅北側に三井アウトレットモールも開業し、すっかり賑やかな町となっています。巡検では、多くの植物化石やモノチス化石が産出している三畳紀の成羽層群や、奈良の大仏の建造に使った銅やベンガラの原料となった磁硫鉄鉱を産出した吉岡鉱山を見学する予定です。

残暑厳しい時期ではありますが、会場周辺には徒歩圏内に多くのホテルもございます。多くの皆様のご参加をお待ち申し上げます！

（世話人代表：山中 寿朗）



倉敷美観地区



成羽層群から産出する植物化石（ニルソニア）



成羽層群から産出する二枚貝（モノチス）

Topics

過去 6 ヶ月間に発表された国内外の有機地球化学研究の中から、ホットな研究トピックスを紹介します。(編集: 藪田, 山下, 齋藤)

15 July 2012 *Geochimica et Cosmochimica Acta*
Vol. 89, Page 159-172 “**Contribution of bacterial cells to lacustrine organic matter based on amino sugars and D-amino acids**”

D. Carstens, K. E. Köllner, H. Bürgmann, B. Wehrli and C. J. Schubert

スイスのブリエンツ湖(貧栄養、有酸素)とツーク湖(富栄養、成層)においてアミノ糖、D-アミノ酸、バクテリア細胞数を春と秋に測定し、バクテリア細胞の有機物への寄与と有機物分解時のアミノ糖とバクテリアバイオマーカーの動態について研究された。アミノ糖濃度は水深とともに減少することから、優先的に分解される。アミノ糖の消失はツーク湖よりもブリエンツ湖で大きく、貧栄養環境でアミノ糖の分解が促進されることが示唆される。水柱におけるアミノ糖比の変化は、水深とともにプランクトンから従属栄養微生物に置き換わっていることを示す。アミノ酸も同様に、水柱上部で高濃度であり、水深とともに減少し、堆積物付近で増加する。ツーク湖における D-アミノ酸の増加は、バクテリアが有機物分解に関与していることを示す。ブリエンツ湖では有機炭素の 0.2~1.4%、ツーク湖では 0.1~5% がバクテリア細胞に由来する。ムラミン酸は死滅したバクテリアの難溶解性物質ではなく、バクテリアバイオマスと主に関係する。バクテリアは湖において有機物分解の重要な駆動者だけでなく、特に貧栄養古ではバクテリア自体が有機物のソースとなる。

12 August 2012, *Nature Geoscience* Vol. 5, Page 618-622 “**Continuous flux of dissolved black carbon from a vanished tropical forest biome**”

T. Dittmar, C. E. de Rezende, M. Manecki, J. Niggemann, A. R. C. Ovalle, A. Stubbins and M. C. Bernardes

人類は地球上の植生分布を変化させるために火を用いてきた。主な例としては、世界有数の

熱帯雨林帯であるブラジルの大西洋岸森林の沼地化と燃焼による破壊があげられる。この熱帯雨林帯は、1850 年以前は $1.3 \times 10^6 \text{ km}^2$ の面積を有していたが、破壊により、現在では元の面積の 8% に縮小している。著者らは土地被覆の歴史的記録と衛星データを用いる事により、1973 年以前のブラジルの大西洋岸森林の燃焼に伴い、 $200\text{-}500 \times 10^6$ トンの黒色炭素が生成されたと見積もった。また、著者らは、この熱帯雨林帯の一部を集水域とする大河川水中の溶存黒色炭素濃度と河川流量から、1997~2008 年の期間における土壌から河川への溶存黒色炭素の流出を評価した。その結果、1973 年を最後に大規模な森林燃焼は無いものの、溶存黒色炭素は毎年雨期に、集水域から河川へと流出し、その流出量は年間 2,700 トンにも達する事が明らかとなった。この結果を過去にブラジルの大西洋岸森林帯であった地域に外挿すると、年間 50,000-70,000 トンの溶存黒色炭素が海洋へと流出していると見積もられた。本研究の結果から、著者らは、陸域における黒色炭素生成量の増加は、海洋の難分解性溶存有機物プールのサイズ増加に繋がる事を示唆した。

13 July 2012, *Science* Vol. 337, Page 212-215

“**A reduced organic carbon component in Martian basalts**”

A. Steele, F. M. McCubbin, M. Fries, L. Karter, N. Z. Boctor, M. L. Fogel, P. G. Conrad, M. Glamoclija, M. Spencer, A. L. Morrow, M. R. Hammond, R. N. Zare, E. P. Vicenzi, S. Siljestrom, R. Bowden, C. D. K. Herd, B. O. Mysen, S. B. Shirey, H. E. F. Amundsen, A. H. Treiman, E. S. Bullock, and A. J. T. Jull

火星の炭素の起源・生成については長い間盛んに憶測がなされてきた。この研究では、10 種類の火星隕石について、高温条件で生成する鉱物(かんらん石、輝石)の流体包有物中にスピ

ネル、金属酸化物の微粒子と共に非生物炭素質物質が分布していることを明らかにした。炭素質物質はグラファイトとは対照的な disordered carbon で、PAHs が検出された。いずれの火星隕石も、炭素含有量および炭素同位体比は同様な値（平均値： $\sim 20 \pm 6$ ppm、 $\delta^{13}\text{C} = \sim -19.8 \pm 4.3\text{‰}$ ）を示し、また ^{14}C がほとんど含まれていないことから、これらの炭素は火星起源であるといえる。マグマ起源鉱物中の有機炭素は、マグマの結晶化過程で低い酸素 fugacity と高い水素 fugacity の高温の C-O-H 流体 ($>1000\text{K}$) から形成され则认为られる。火星ではプレートテクトニクスは活発でなかったた

めに惑星地殻—マンツルの物質交換は起こりにくかったことから、この火星隕石中の炭素は火星内部に炭素が存在する証拠といえる。流体包有物中からは CH_4 , CO_2 は検出されなかったが、火星内部に存在する還元的炭素から火星大気に非生物的な CH_4 が供給される可能性を残す結果である。火星隕石の結晶化年代から、火星内部において炭素、水素の貯蔵が起こったのは比較的初期で、天体の分化過程であつたであろうと考えられる。このような非生物的炭素の生成・運搬プロセスはおそらく火星に特有なものではなく、初期地球を含むさまざまな惑星で起こつたものと期待される。

「2012 年度総会」議事録

1. 日 時:2012 年 8 月 22 日 (水) 16:00～17:30

2. 場 所:東北大学 百周年記念会館 (川内萩
ホール)

3. 議事内容 1: 事業全般および承認事項

3.1. 2011 年度実施事業および会計報告 (2011
年 1 月 1 日～12 月 31 日)

以下の資料に沿って事務局から説明があり、
出席者の賛成多数により承認された。

3.1.1. 2011 年度事業報告

(1) Publication 関係

- ・ ニュースレター No.52 (2011.1.11)、No.53
(2011.6.17) 発行
- ・ ROG Vol.27 (2011.9)発行: 154 ページ

(2) Meeting 関係

- ・ 学術賞受賞候補者選考委員会 (2011.6;
email にて)
- ・ 田口賞受賞候補者選考委員会 (2011.6;
email にて)
- ・ 運営委員会 (2011.8.31; 九州大学西新プラ
ザ、email にて随時)
- ・ 第 29 回有機地球化学シンポジウム
(2011.9.1～9.3; 九州大学西新プラザ)

・ 総会 (2011.9.1; 九州大学西新プラザ)

・ ROG 編集委員会

・ 記念出版物編集委員会

・ 将来計画委員会

(3) 事務局関係

- ・ 震災に対応した学会としての活動につい
て: メールで意見募集
- ・ ROG の電子化: 26 号を「電子図書館」で、
22～25 号を学会 HP で公開 (除「技術論文」)
- ・ 賛助会員の勧誘・ROG の販売促進・シンポ
ジウム協賛の勧誘
- ・ 事務局運営会議 (email にて随時)
- ・ 会計処理・会員管理

3.1.2. 2011 年度会計報告: 資料 1 参照

3.1.3. 2011 年度会計監査報告

有機地球化学会および田口基金の 2011 年度
会計報告を、出納簿、領収書、郵便料金受領書、
その他提示された証明書類に基づいて審査した
結果、これらが正確に処理されていると認めら
れましたので、ここに報告致します。

平成 24 年 7 月 25 日
監事 平井 明夫 印

一般会計

大項目	小項目	2010年度	2011年度				コメント
		決算	当初予算	中間修正	決算	対中間増減	
収入	賛助会費	180,000	180,000	200,000	200,000	0	7社10口
	個人会費	265,000	240,000	210,000	148,000	-62,000	
	ROG販売	11,740	4,000	521,650	526,620	4,970	ROG26号92冊、27号81冊
	シンボ協賛金	153,192	40,000	90,000	90,000	0	賛助会員5社9口
	剰余金						
	利子ほか	379	500	254	241	-13	
	計	610,311	464,500	1,021,904	964,861	-57,043	
前年度繰越金		990,038	1,543,614	1,543,614	1,543,614	0	
総計		1,600,349	2,008,114	2,565,518	2,508,475	-57,043	
支出	ROG印刷費	0	1,000,030	1,105,030	1,116,360	11,330	26, 27号印刷費
	送料	1,840	41,760	36,240	16,900	-19,340	未清算分: 18422円
	HP維持費	23,940	28,000	27,615	31,290	3,675	未清算分: 23940円
	シンボ予備費	129	40,000	50,000	0	-50,000	
	事務局経費	30,000	30,000	30,000	0	-30,000	未清算分: 3500円
	雑費	826	30,000	30,000	210	-29,790	
	計	56,735	1,169,790	1,278,885	1,164,760	-114,125	
次年度繰越金		1,543,614	838,324	1,286,633	1,343,715	505,391	
総計		1,600,349	2,008,114	2,565,518	2,508,475	391,266	

前年度繰越金は2010年度決算により修正 (次年度繰越金も連動)
未清算分は、支払いが確定しているが支払い処理が完了していないもの。

資料 1 2011 年度会計報告

田口基金

大項目	小項目	2010年度	2011年度				コメント
		決算	当初予算	中間修正	決算	対中間増減	
収入	利子	13,547	100	35	44	9	
前年度繰越金		1,821,704	1,784,467	1,784,467	1,784,467		
総計		1,835,251	1,784,567	1,784,502	1,784,511		
支出	副賞(田口賞)	50,784	50,000	50,500	50,000	-500	
次年度繰越金		1,784,467	1,734,567	1,734,002	1,734,511	509	
総計		1,835,251	1,784,567	1,784,502	1,784,511		

前年度繰越金は2010年度決算により修正(次年度繰越金も連動)

資料 1 (つづき) 2011 年度会計報告

3.2. 2012 年度事業・会計中間報告 (2012 年 1 月 1 日～12 月 31 日)

以下の資料に沿って事務局から説明があり、出席者の賛成多数により承認された。

3.2.1. 2012 年度実施事業：中間報告 (2012 年 1 月 1 日～7 月 31 日)

(1) Publication 関係

- ・ ニュースレターNo.54 (2012.1.25)、No.55 (2012.6.20) 発行

(2) Meeting 関係

- ・ 運営委員会 (email にて随時)
- ・ 学術賞受賞候補者選考委員会 (2012.6; email にて)
- ・ 田口賞受賞候補者選考委員会 (2012.6; email にて)
- ・ ROG 編集委員会
- ・ 記念出版物編集委員会
- ・ 将来計画委員会

(3) 事務局関係

- ・ ROG 電子化 (27 号の「電子図書館」における公開)
- ・ 賛助会員の勧誘・ROG の販売促進・シンポジウム協賛の勧誘
- ・ 事務局運営会議 (email にて随時)
- ・ 会計処理・会員管理

3.2.2. 2012 年度実施事業：今後の計画 (2012 年 8 月 1 日～12 月 31 日)

(1) Publication 関係

- ・ ROG Vol. 28 発行

(2) Meeting 関係

- ・ 運営委員会 (2012.8.21; 東北大理学部地学専攻棟、email にて随時)
- ・ 第 30 回有機地球化学シンポジウム (2012.8.22～8.23; 東北大学百周年記念会館)
- ・ 総会 (2012.8.22; 東北大学百周年記念会館)

- ・ ROG 編集委員会

- ・ 記念出版物編集委員会

- ・ 将来計画委員会

(3) 事務局関係

- ・ ROG 電子化 (ROG26, 27 号の学会 HP での公開)
- ・ 賛助会員の勧誘・ROG の販売促進
- ・ 事務局運営会議 (email にて随時)
- ・ 会計処理・会員管理・ホームページの更新

3.2.3. 2012 年度会計中間報告 (2012 年 1 月 1 日～7 月 31 日) および今後の計画 (2012 年 8 月 1 日～12 月 31 日)：資料 2 参照

3.3. 2013 年度事業・会計計画 (2013 年 1 月 1 日～12 月 31 日)

以下の資料に沿って事務局から説明があり、出席者の賛成多数により承認された。

3.3.1. 2013 年度事業計画

(1) Publication 関係

- ・ ニュースレターNo.56、No.57 発行
- ・ ROG Vol. 29 発行

(2) Meeting 関係

- ・ 第 31 回有機地球化学シンポジウム
- ・ 総会・運営委員会
- ・ ROG 編集委員会
- ・ 記念出版物編集委員会
- ・ 将来計画委員会

(3) 事務局会計

- ・ 賛助会員の勧誘・ROG の販売促進・シンポジウム協賛の勧誘
- ・ 事務局運営会議 (email にて随時)
- ・ 会計処理・会員管理・ホームページの更新・ROG の電子化

3.3.2. 2013 年度会計計画：資料 3 参照

一般会計

大項目	小項目	2012年度					コメント
		当初予算	修正予算	上期実績	下期見通し	増減	
収入	賛助会費	200000	200000	160000	40000	0	7社10口
	個人会費	240000	239000	39000	200000	-1000	
	ROG販売	20000	46720	26720	20000	26720	25号1冊, 26号3冊, 27号5冊販売済み
	シンボ協賛金	50000	81656	0	81656	31656	協賛金 賛助会員6社8口
	剰余金						福岡シンボ剰余金1656円
	利子ほか	500	102	102		-398	
	計	510500	567478	225822	341656	56978	
前年度繰越金		1343715	1343715			0	
	総計	1854215	1911193			56978	
支出	ROG印刷費	300000	300000	0	300000	0	ROG28号70ページ想定
	送料	30000	30000	0	30000	0	未清算分:約2万円
	HP維持費	30000	51615	27615	24000	21615	サーバー使用料2011,2012年度分
	シンボ予備費	50000	50000	0	50000	0	
	事務局経費	30000	10000		10000	-20000	未清算分:3500円
	雑費	30000	10210	210	10000	-19790	
	計	470000	451825	27825	424000	-18175	
次年度繰越金		1384215	1459368			75153	
	総計	1854215	1911193			56978	

前年度繰越金は2011年度決算により修正(次年度繰越金も連動)

田口基金

大項目	小項目	2012年度					コメント
		当初予算	修正予算	上期実績	下期見通し	増減	
収入	利子	30	38	22	16	8	
前年度繰越金		1734511	1734511			0	
	総計	1734541	1734549			8	
支出	副賞(田口賞)	50500	50500	0	50500	0	
次年度繰越金		1684041	1684049			8	
	総計	1734541	1734549			8	

前年度繰越金は2011年度決算により修正(次年度繰越金も連動)

資料 2 2012 年度会計中間報告

一般会計

大項目	小項目	2011年度	2012年度	2013年度	コメント
		決算	修正予算	予算	
収入	賛助会費	200,000	200,000	200,000	7社10口
	個人会費	148,000	239,000	240,000	
	ROG販売	526,620	46,720	50,000	
	シンボ協賛金	90,000	81,656	50,000	5社5口
	剰余金				
	利子	241	102	100	
	計	964,861	567,478	540,100	
前年度繰越金		1,543,614	1,343,715	1,459,368	
	総計	2,508,475	1,911,193	1,999,468	
支出	ROG印刷費	1,116,360	300,000	400,000	ROG29号100ページ想定
	送料	16,900	30,000	30,000	
	HP維持費	31,290	51,615	28,000	
	シンボ予備費	0	50,000	50,000	
	事務局経費	0	10,000	30,000	
	雑費	210	10,210	30,000	
	計	1,164,760	451,825	568,000	
次年度繰越金		1,343,715	1,459,368	1,431,468	
	総計	2,508,475	1,911,193	1,999,468	

田口基金

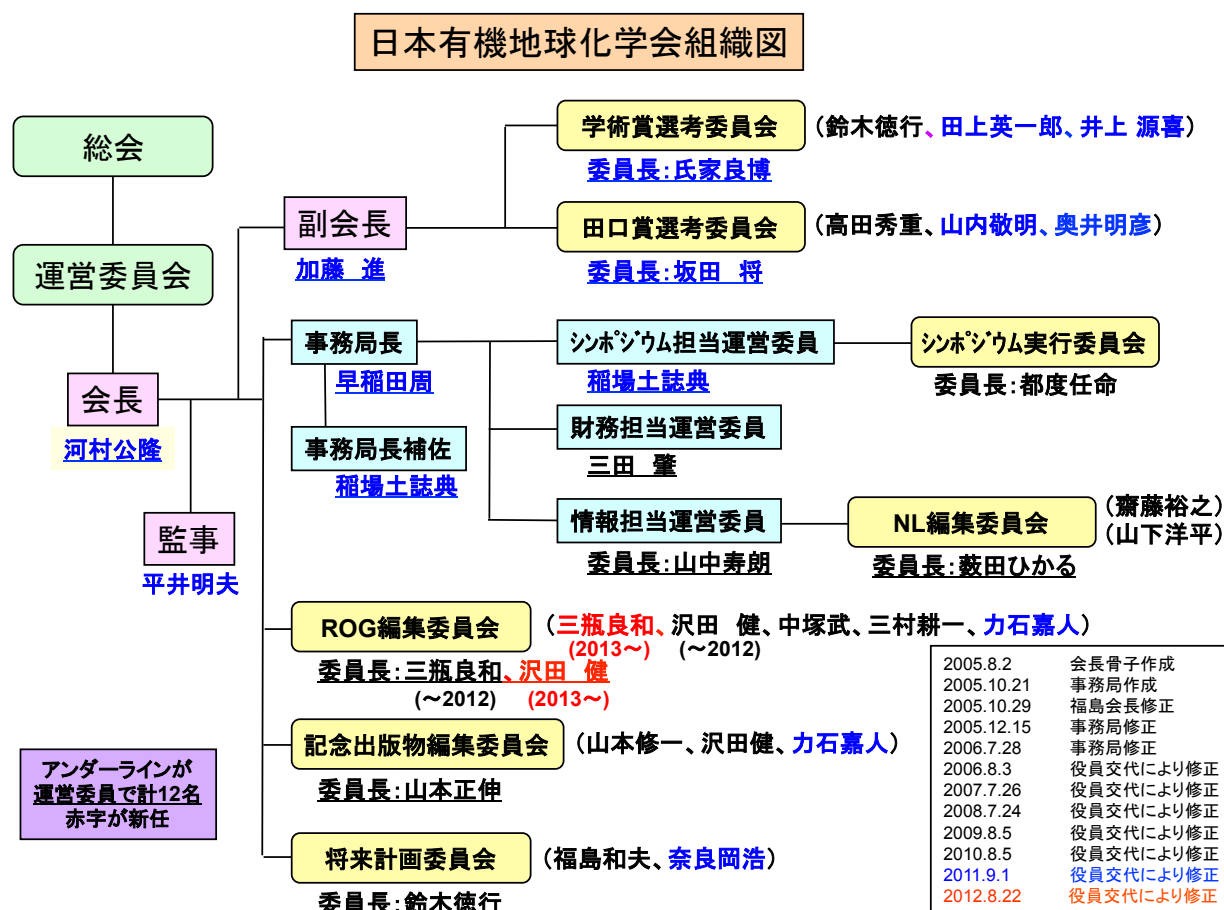
大項目	小項目	2011年度	2012年度	2013年度	コメント
		決算	修正予算	予算	
収入	利子	44	38	30	
前年度繰越金		1,784,467	1,734,511	1,684,549	
	総計	1,784,511	1,734,549	1,684,579	
支出	副賞(田口賞)	50,000	50,000	50,000	
次年度繰越金		1,734,511	1,684,549	1,634,579	
	総計	1,784,511	1,734,549	1,684,579	

資料 3 2013 年度会計計画

3.4. 役員改選について

会長より、以下の役員改選の提案（赤字が新役員および新役職）があり、出席者の賛成多数により承認された。

編集委員長の交替は規定では総会をもって実施することになっているが、事情により今回は年度替わりでの交替が提案され、認められた。



4. 議事内容 2 : 各委員会活動報告

4.1. 学術賞選考委員会

氏家委員長が欠席したため、事務局より以下のような学術賞選考結果の報告があった。

- ・ 今年度も応募がなく、受賞該当者なし。
- ・ 来年度以降の「積極的な推薦・応募」をお願いしたい。

4.2. 田口賞選考委員会

坂田委員長より、以下のような田口賞選考結果の報告があった。

- ・ 受賞者：高橋 聡
- ・ 所属・職名：東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻・助教
- ・ 研究題目：古生代-中生代境界における遠洋域深海堆積岩の古生物学的地球化学的研究
- ・ 研究業績：論文 12 編、総説 6 編、共著 2 冊

- ・ 推薦者：海保邦夫会員

4.3. ROG 編集委員会

三瓶委員長より、以下の活動状況報告および投稿規定改定の提案があった。投稿規定改訂提案については出席者の賛成多数により承認された。

4.3.1. ROG28 号編集状況について

- ・ 1 編（技術論文）を受理。
- ・ 2 編（田口賞記念総説 1、論文 1）を査読中。
- ・ その他、3～4 編の投稿を待っている。

4.3.2. 編集委員長の交代について(会長・事務局提案による)

- ・ 来年度号(2013 年 ROG Vol.29)より、島根

大三瓶から北大沢田に交代する。三瓶現委員長は交代後も当面委員として残り、新委員長をサポートする。

4.3.3. 投稿規定の改訂：短報の位置づけ変更

(1) 趣旨

- ・ 現在、ROG では特集号を除いて投稿数が減少している。
- ・ 短報に関する本改正は、投稿数増加を促進・確保し ROG 内容の充実・安定化を図るとともに、これまでは埋もれてお蔵入りしがちであった学生・ポスドク等による研究データの公表チャンスを広げることを目的とする。
- ・ この新たな位置付けは、ROG および HP 上で周知を図る。

(2) 投稿規定の改定

- ・ 短報が「原著論文である」という位置づけをより明確にするため、短報の英文表記を”notes” から”short articles”に変更。
- ・ 速報性、新規性および信頼できる重要なデータの蓄積を重視し、研究成果としてやや不完全のものであっても公表する価値があると判断される場合には受理する(学生やポスドクが行った研究には、データ等が公表できずに埋もれてしまうケースがよくあるが、それらを世に出す場を提供する)。
- ・ 卒論研究・修士研究・博士研究等の過程において論文の作製・投稿・掲載におけるノウハウが学べる場を提供し、若手研究者の育成を学会がサポートする。そのため、短報は英文投稿を推奨する。
- ・ 主に学生やポスドクを対象として原稿を募る努力をするが、一般研究者による投稿も歓迎する。
- ・ 刷り上がり 4 頁以内の制限があるため、学会 HP よりテンプレートをダウンロードし、それを用いてもらう。

4.4 記念出版物編集委員会

山本委員長が欠席したため、事務局より以下の活動状況の報告を行った。

4.4.1. 1 年間の活動経緯

- ・ 2011 年 9 月 22 日：化合物検索マニュアル編集委員会@インターラーケン (IMOG にて)：出席者：山本正伸、山本修一、沢田健、力石嘉人
- ・ これまでの経緯、「ひな形」作成状況、電子

化、想定する読者、執筆体制、言語について議論し、企画（第 0.5 次案）を作成。

4.4.2. 企画（第 0.5 次案）

- ・ 名称：冊子体と電子版を出版する。それぞれ名称を考える。
- ・ 目的：
 - 冊子体：有機地球化学分野の学生が化合物を同定する作業を進めるための基礎知識を提供する。学部学生が独習可能なように、分かりやすく解説を行う。
 - 電子版：天然環境中の有機化合物を検出・分析する方法と、検出に必要な情報をマニュアル化する。これまで研究室や個人単位で集積されてきた有機分子同定データを出版することにより、有機地球化学研究者および関連分野の研究活動の効率化および推進に寄与する。
- ・ 想定される読者：有機地球化学（＝会員、200 名程度）の学生および研究者
- ・ 規模：B5 版（1848 字）で 200 ページ前後。以下の 4 章からなる。前処理、GC/MS、LC/MS（短く）、GC/IRMS（短く）
- ・ 原稿の完成状況
 - 冊子体：技術論文のデータと記述を参考に新たに書き下ろす。
 - 電子版：ROG をそのまま電子化するのであれば、現状で 100% 完成。データをデータベース化するのであれば、今後編集を進める。
- ・ 電子データの公表：CD で出版する。
- ・ 販売形態：学会出版物？（ひな形作成後、再度検討）
- ・ 今後の検討課題：ひな形を作成し、実現可能性を再度検討する。

4.4.3. 会員からの意見

- ・ 金子会員：「技術論文をそのまま電子化するのであれば完成」と書いてあるが、査読した際に間違いが随分あった。もう一人の査読者が気づかないときもあった。必要がないと見ないものなので、過去に出された技術論文について間違いがないか不安。電子化前に間違いがないか著者がチェックする必要があると思う。
- ・ 奥井会員：冊子体と電子版は別々で売るのがか。
- ・ 力石記念出版物編集委員：冊子体本体は日本

語で細かいことを書かず技術論文を引用する形。電子版はデータ蓄積物のようなもの。どう扱うかはまだ確定していない。データのアップデートをしなくてはならないが具体的な方法は決まっていない。おそらく基本の部分は本で出し、アップデートが可能なものは電子版でサポートできるようなものにしたい。最初は本の付録のような形で電子版を添付してもいい。間違いも言われてから修正するような形ができれば良い。

- ・ 早稲田事務局長：早めに決めていってほしい。
- ・ 石渡名誉会員：有償か無償か？ 著作権の扱いは？
- ・ 早稲田事務局長：まだはっきりしていない。
- ・ 力石記念出版物編集員：売ってしまうとデータ更新時に問題が生じる。
- ・ 早稲田事務局長：会員向けということなので無償になるのかもしれない。一般に広く売わけではないかもしれない。
- ・ 力石記念出版物編集員：本は売るように考えている。データ更新と著作権の問題は検討が必要。
- ・ 石渡名誉会員：売らなければ問題は無いとこのことを以前聞いた。
- ・ 三田財務担当運営委員：技術論文については原著でやっている。そのため学会が権利を所有しているので学会が使う分には問題ない。

4.5. 将来計画委員会

鈴木徳行委員長より、将来の学会法人化や学会規定・内規の整備等について検討を始めた旨、報告があった。

5. 議事内容 3：その他、報告事項

以下の各種報告が事務局よりなされた。

5.1. 来年度のシンポジウム開催場所

5.1.1. 経緯

- ・ 昨年度、事務局内で検討した際、岡山大（世話人：山中会員）から主催して構わないとの返答を頂いたが、前年の福岡から2年続けて西日本になるのは気になる、とのコメントがあった。そこで事務局から公募したところ、東北大（世話人：海保会員、大庭会員）から立候補があり、今年度は東北大に決まった。
- ・ 今回、岡山大に来年度の開催意思を確認したところ、来年度開催希望との返事を得た。来

年度は岡山大（世話人：山中会員）にお願いすることにしたい。

5.1.2. 過去の開催実績

- ・ 1 回主催：東大、弘前大、大妻女大、高知大、金沢大
- ・ 2 回主催：都立大、名古屋大、帝石、産総研、信州大、北大、東北大
- ・ 3 回：島根大、石油資源、九州大

5.1.3. 来年度シンポジウムの計画

- ・ 第 31 回有機地球化学シンポジウム（2013 年倉敷シンポ）
- ・ 開催時期：8 月 20 日前後、開催場所：倉敷美観地区周辺、巡検も計画中

5.2. 会員の現況（2012 年 8 月 20 日時点）

- ・ 入会：3 名
 - 正会員：内田 昌男（1 名）
 - 学生会員：中田 亮一（1 名）
 - 賛助会員：国際石油開発帝石株式会社（1 社）
- ・ 退会：3 名
 - 正会員：古宮 正利（予定）、土田 邦博（予定）（2 名）
 - 学生会員：斎藤 直樹（1 名）
- ・ 除籍：2 名
 - 正会員：奥田 義久、小田 浩（2 名）
- ・ 現況：180 名（2011 年度 182 名）
 - 正会員：122 名（2011 年度 125 名）
 - 学生会員：45 名（2011 年度 45 名）
 - 名誉会員：6 名（2011 年度 6 名）
 - 賛助会員：7 社（2011 年度 6 社）

5.3. ROG 電子化について

- ・ 現在 1 号から最新 27 号まで「技術論文」を除いてすべて国立情報学研究所（NII）で運用している「電子図書館（NII・ELS）」にて全文無料公開中。
- ・ 問題点と対策
 - 「電子図書館」の PDF は冊子のスキャンなので解像度が低い。カラー印刷にも未対応。
 - 最近の会誌（22 号以降）は、印刷用に PDF 化された原稿がある。この PDF は本文も画像ではなく、全文検索でき、印刷時の品質も高い。このファイルの「電子図書館」

への掲載可能性を NII に問い合わせた。

(NII 回答)

- 「冊子体からの電子化」以上に手間が発生する可能性があり、受け入れていない。
- 「電子図書館」での提供条件が、無料一般公開であり権利関係での問題はないので、学会の HP で高解像度の PDF ファイルを公開することは問題ない。
- ・ 昨年度総会（9/1 福岡）での決定事項
 - 新しい ROG が冊子体で出版される限り、NII に送って電子化をお願いする。
 - 会誌印刷用に作られた高解像度、テキスト検索可 PDF の学会 HP での公開を検討する。
- ・ 昨年総会後の進捗
 - 学会 HP での印刷用 PDF 公開について、PDF を作成した出版社に問題ないことを確認。

➤ ROG 22～25 号について「技術論文」を除いて論文 PDF を学会 HP で公開完了。

・ 今後の予定、課題

- ROG 26,27 号の学会 HP での公開
- 今後も「電子図書館」と学会 HP での公開を継続。PDF ファイルの試験的受け入れ連絡有り。

5.4. 震災に対応した学会としての活動について
昨年の総会で大震災に関連した学会活動について議論した。その後、会員にメールで意見を募ったが、特に意見・提案はなかった。引き続き提案等があれば受け付けるが本学会としての活動は今のところ予定していない。会員各位におかれてはそれぞれ関係あるコミュニティでできることをしていただきたい。

以上

年会費納入のお願い

会員の皆様には日頃よりご支援いただき、誠にありがとうございます。本学会は、1 月より新しい会計年度になっております。新年度の会費の納入をよろしくお願い致します。また、本年度までの年会費を納入いただいている方は、併せて納入いただけますようお願い致します。

年会費： 正会員 2,000 円

学生会員 1,000 円

振込み先： 郵便振替口座 00110-7-76406

(名義人：日本有機地球化学会)

最終納入年度の分からない方、銀行口座より

の送金をご希望の方、所属機関より納入されるなど会員登録名以外でお振込みの方は、事務局財務担当の三田 (mita@fit.ac.jp) までお知らせください

※異動・転居された方へ

職場や自宅が変わられた方は、会員管理と会誌郵送のために、新しい住所、電話番号等を事務局までご連絡下さい。また、E-mail アドレスをお持ちの方は、ニュースレターのメール配信等のため、差し支えない限り、E-mail アドレスを事務局 (secret08@ogeochem.jp) までお知らせ頂くようお願い致します。

有機地球化学会ホームページ、さらに更新！

有機地球化学会のホームページ (<http://www.ogeochem.jp>) などを通じて会員の皆様に役立つ情報の配信に努めるべく、少しずつですがホームページの更新などを進めております。ニュースレター同様、会員の皆様のご協力あつてのホームページですので、今後とも情報提供など、どうぞよろしくお願いいたします

ます。

そこで、これまであまり紹介したことがなかったと思いますので、情報提供の方法などについてお知らせ致します。

1. 会員に広く、速やかに知らせたい情報（公募情報など）

会員メーリングリスト（member@ogeochem.jp）はメーリングリストを受け取ったことのある会員の方でしたらどなたでも自由に投稿できるようになっています。遠慮なくご利用下さい（添付ファイルについては事務局か情報担当運営委員の山中までお問い合わせ下さい）。

なお、公募情報はホームページにも速やかに掲載します。

2. 関連学会やシンポジウムなどの情報

本学会の会員に広く関連すると思われる学会やシンポジウムについて、本学会のホームページからリンクや、特設ページの開設を致します。遠慮なくご相談下さい。

3. 特定用途のメーリングリストの開設

本学会の会員が主要メンバーとなるようなシンポジウムや若手会などの情報発信のために必要であれば専用のメーリングリストの開設を ogeochem.jp ドメインで致します。遠慮なくご相談下さい。

お願い：現在、会員メーリングリストの整理を行っています。メーリングリストが届いていないという方が周りにおられましたら、山中（toshiroy@cc.okayama-u.ac.jp）までご一報下さい。

以上、今後とも本学会ホームページなどの充実にご支援賜りますようよろしくお願い申し上げます。

（文責：情報担当運営委員・山中寿朗）

Announcement

有機地球化学賞(学術賞)2013 年度受賞候補者推薦の募集

有機地球化学賞(学術賞)2013 年度受賞候補選考委員会
委員長 氏家 良博

有機地球化学賞(学術賞)受賞者選考規則により、選考候補者の推薦を募集いたします。つきましては、下記をご参照のうえ受賞候補者をご推薦ください。

記

候補者の資格：有機地球化学の研究分野で顕著な学術業績をあげた本会会員。

募集の方法：本会会員の推薦による(自薦他薦を問いません)。

推薦の方法：下記の事項を A4 サイズの用紙に任意の様式で記入し、書留で郵送すること。(同内容のものを電子メールでも提出してください)

- 1) 候補者の履歴(大学卒業以降の学歴、職歴、その他)
- 2) 推薦の対象となる研究題目および推薦

理由

- 3) 研究業績目録(推薦の対象となる主要な論文 10 編)

- 4) 推薦者の氏名と連絡先

締め切り日：2013 年 5 月 31 日(木)(当日消印有効)

提出および問い合わせ先：〒036-8561 弘前市文京町 3 弘前大学理工学研究科 地球環境学科

氏家 良博

電話・ファックス：0172-39-3952

E-mail：ujiie@cc.hirosaki-u.ac.jp

これまでの受賞者と研究題目については <http://www.geochem.jp/archives.html> (日本有機地球化学会 HP「学会アーカイブス」) をご覧ください。

研究奨励賞(田口賞)2013 年度受賞候補者の募集

研究奨励賞(田口賞)2013 年度受賞候補選考委員会
委員長 坂田 将

研究奨励賞(田口賞)受賞候補者選考規則により、同賞受賞候補者推薦を募集いたします。つきましては、下記をご参照のうえ受賞候補者をご推薦下さい。

記

候補者の資格：生年月日が 1979 年 4 月 2 日以降で、有機地球化学、石油地質学、堆積学の 3 分野のいずれかで優れた研究を行い、将来にも研究の発展を期待できる方。本会会員に限りません。

募集の方法：本会会員の推薦による(自薦他薦

を問いません)。推薦の方法：A4 サイズの用紙に下記事項を任意の形式で記述し、郵送するか、PDF ファイルとして E-mail に添付してお送り下さい。

- 1) 推薦理由及び研究題目
- 2) 研究業績目録
- 3) 研究論文の別刷り又はコピー
- 4) 履歴書
- 5) 推薦者の氏名と連絡先

締め切り日：2013 年 5 月 31 日(木)(当日消印有効)

提出及び問い合わせ先：〒305-0821 茨城県つ

ば市東 1-1-1 中央第七 地圏資源環境研究部
門
坂田 将
電話：029-861-3898
ファックス：029-861-3666
E-mail：su-sakata@aist.go.jp

これまでの受賞者と研究題目については
<http://www.ogeochem.jp/archives.html> (日本有機地球化学会 HP「学会アーカイブス」) をご覧ください。

ROG Vol. 29 への投稿原稿を募集中！！

Researches in Organic Geochemistry

編集委員長 三瓶 良和

ROG (Researches in Organic Geochemistry) は本学会の学会誌であり、有機地球化学およびそれに関連する論文を掲載し、年 1 回発行しています。Vol.28 は、投稿数が例年になく少なかったため投稿〆切を伸ばして 12 月末発行となりました。会員の皆様にはご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした。

平成 24 年度の仙台シンポ総会では、以下の投稿規定の改正が承認されました。最近は、特集号以外は投稿数が減少傾向にありますので、この規則改正を契機として多くの方がご投稿くださることをお待ちしております。

2012 投稿規定の改正

ー 新たな「短報」の位置づけについて ー

短報の投稿規定が新しくなり、投稿しやすくなりました (詳しくは ROG vol.28 巻末をご覧ください)。特に学生の皆さん、および価値あるデータをお蔵入りさせてしまっている皆さんは、ふるってご投稿ください！

(改正の趣旨)

近年、ROG では特集号を除いて投稿数が減少しております。編集委員会では、投稿数増加を促して内容の充実および掲載論文数の安定化を図るとともに、これまでは埋もれてお蔵入りしがちであった学生・ポスドク等による研究データや公表のチャンスを逸した価値あるデータ等を世に出すチャンスを広げることを目

的として、主に短報に関する投稿規定の改正を行うことにいたしました (2012 仙台シンポ運営委員会および総会で承認)。

改訂の内容とその意義については、以下のとおりです。

(1) 短報が「原著論文である」という位置づけをより明確にするため、短報の英文表記を“notes”から“short articles”に変更し、レターと併せて新たな「短報」とする。したがって、レターの区分は削除する。

(2) 速報性、新規性および信頼できる重要なデータの蓄積を重視し、研究成果としてやや不完全のものであっても公表する価値があると判断される場合には受理する (学生やポスドクが行った研究の一部にはデータが公表できずに埋もれてしまうケースが良くあるが、それらを世に出す場を提供する。また、一般の研究者についても、投稿する機会を逸した過去のデータ等を公表する機会を提供する。)

(3) 主に学生やポスドクを対象として原稿を募る努力をするが、一般研究者による投稿も歓迎する。

(4) 卒論研究・修士研究・博士研究等の過程において論文の作製・投稿・掲載におけるノウハウが学べる場を提供し、若手研究者の育成を学会がサポートする。そのため、短報は英文投稿を推奨する。

(5) 刷り上がり 4 頁以内の制限があるため、学会 HP よりテンプレートをダウンロードし、そ

れを用いていただく。

今後受付の論文等については、次号 Vol. 29 に掲載されます。カテゴリーは、1) 論文 (articles), 2) 短報(short articles), 3) 技術論文 (technical paper), 4) 総説 (review)です。有機地球化学シンポジウムで発表された内容や、博士論文・修士論文成果の発表なども歓迎いたします。詳細は、ROG Vol.28 の巻末の投稿規定をご参照ください。編集委員会へのご意見・ご要望等お待ちしております。

最後になりましたが、次号から編集委員長が変わります。交代にあたりまして、これまでご

投稿・ご協力いただいた多くみなさまに心より御礼を申し上げます。新委員長は北大の沢田さんです。新編集委員長のもと、ROG がますます発展することを祈念しております。今後とも、何卒、よろしくお願いいたします。

今後のご投稿・ご連絡は下記の新編集委員長宛までお願いいたします。

PDF 添付ファイルによる電子投稿：

sawadak@mail.sci.hokudai.ac.jp

郵送：〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目
北海道大学大学院理学院地球惑星科学専攻
沢田 健 編集委員長宛
(TEL: 011-706-2733)

編集後記：

先月にはあと何日でやっと思ひだ一っ！と待ち遠しかったココロが、年末年始の数日間をまったりと過ごしているうちに一転、おしごとせねばという焦燥感でうずうずしてくるのはどうしてか・・・ないものねだり。いまこの一瞬一瞬に感謝してあゆみたいと思います。皆さまにとって輝かしい 1 年になりますようにお祈りいたします。本年もよろしくお願いいたします。(やぶ)
あつという間の 2012 年でした... 2013 年は少し落ち着いて物事に組みたいです。(山)
国際学会に参加された方は是非 Oversea Report への寄稿をお願い致します。(齋)

発行責任者 有機地球化学会会長 河村 公隆

〒060-0819 札幌市北区北 19 条西 8 丁目 北海道大学低温科学研究所

Phone: 011-706-5457, Fax: 011-706-7142

日本有機地球化学会事務局

〒261-0025 千葉県千葉市美浜区浜田 1-2-1

石油資源開発(株) 技術研究所 内

事務局長 早稲田 周

Phone: 043-275-9311, Fax: 043-275-9316

e-mail: office@ogeochem.jp

郵便口座 00110-7-76406 (名義人 日本有機地球化学会)

編集者 藪田ひかる (大阪大学大学院理学研究科) 齋藤裕之 (北海道大学創成研究機構研究部)

山下洋平 (北海道大学大学院地球環境科学研究院)

e-mail: news@ogeochem.jp

有機地球化学会ニュースレターはホームページでもご覧になれます。

アドレス：<http://www.ogeochem.jp/>